

東洋紡のRO膜開発秘話を披露

神戸大先端膜
工学研究機構

第8回MBTAを開催

国内唯一の膜工学研究拠点として、産学連携で膜工学の先端研究と人材育成を推進している神戸

大学先端膜工学研究推進

機構は5月17日、第8

回MBTA（メンブレ

ン・ビジネス&テクノロ

ジー・アカデミー）を大

学内で開催した。今回は

「RO膜開発の秘話」を

テーマに、東洋紡関係者

による海水淡水化膜の講

演などが行われ、関係者

ら約60人が聴講した。

冒頭、松山秀人・同機

構長は「RO（逆浸透）

膜は正浸透膜、高濃度海

水処理の塩水濃縮膜など

に応用されており、膜技

実装を想定し、ビジネスの考え方と膜技術発展の方向性について、2022年度からテーマごとに議論していることなどを紹介。また、RO膜の開発背景事情として、東洋紡が1971年からRO膜の研究開発を開始し、繊維製造で培った技術を、中空糸機能膜などの製造に転用してきた歴史などを説明した。

続いて、関野政昭・元東洋紡取締役執行役員が「海水淡水化膜（SWRO）モジュールと共に」と題して講演。関野氏は1972年の入社以来、海水淡水化膜をはじめ、RO膜の基礎開発・生産技術などに携わってきた経験や、実証実験や失敗の最小化などの必要性を指摘した。

また、同社の製品を導入した福岡市海水淡水化プラントが20年間、運転継続中であることに触れ、若手技術者や研究者への期待として、「自らを駆り立て、深掘りを進め、執念を持って極める」ことを挙げた。

続いて、北河享・神戸大学大学院科学技術イノベーション研究科特命教授がMBTAの開催趣旨として、開発膜の社会

術開発や社会実装の進め方などを参考に「とあいさつ」。

つ。

約60人が聴講したMBTA

また、同社の製品を導入した福岡市海水淡水化プラントが20年間、運転継続中であることに触れ、若手技術者や研究者への期待として、「自らを駆り立て、深掘りを進め、執念を持って極める」ことを挙げた。



関野氏



松山機構長